


【イベント報告】



イベント報告

◆ 展覧会「スキン・ダイブ～感覚の回路を開く～」実施報告

安藤 泰彦

成安造形短期大学

(News letter Vol. 4, No. 7)

京都では例年、5月から6月にかけて市内各所の会場で芸術祭典・京という催しが開かれている。今回、その造形部門として「スキン・ダイブ～感覚の回路を開く～」というタイトルで展覧会を企画した。私達が日常つい見過ごしがちである皮膚や感覚といったものに焦点をあて、もう一度多様な視点から見直してみるというコンセプトのもとに、写真、絵画、映像、インスタレーション（仮設装置）など十数名のアーティストの作品展示、そして本展覧会の試みの一つである美術領域外からのアプローチとして、テーマに関連する大学の研究や幾つかの企業、工房の製品の展示・紹介を行ない、また哲学や宗教人類学の講演、対談を併せて開催した。

展覧会場となったのは現在廃校となっている市内の小学校であり、昭和初期に建てられた一種、趣のある校舎の各教室がそれぞれの作家や研究室の展示空間としてわりあてられた。

今回の展覧会では、北海道大学の感覚情報研究室、ならびに日立製作所、日本製鋼所室蘭研究所の協力を得、研究成果の一部を実験機材やパネル、ビデオを用いて一つの教室内に展示することができた。触知ボコーダー、話速変換器、人工喉頭、水素吸蔵合金アクチュエーターなど、観客が実際に触れて体験できる装置によって、研究内容をより身近なものとして、また驚きを持って体感できたのではないかと思う。また、京都の工房による視覚的には本物と区別がつかないほどのリアルな皮膚感を持つ義手の展示、オリンパス株式会社の製品スキャントーカーを利用した視覚的な障害を持つ作家による音声絵画の試み、またパイオニア株式会社のサラウンドチェアを用い

たサウンドアーティストによる音響空間の構成など、これまでの美術鑑賞という枠組みを超え、様々な問題を投げ掛ける場が設定できた。このことで視覚、聴覚、肢体などの障害をもつ人達も含めた幅広い観客層が楽しめる空間が生まれたように思う。

一つのテーマや問題提起をもとに、一つの空間に隣接展示された美術の領域や、大学や企業の研究領域からの展示は、観客／受け手とのフィードバックを介することで干渉しあい、より多層な問題の広がりを生み出す。それはまた、今後それぞれの領域の活性化にもつながるのではないだろうか。

<http://www.skindive.project.ne.jp/index.html>

◆ 「メディアの足し算、記号の引き算～石井裕氏講演」参加報告

小俣貴宣

東京都立科学技術大学

(News letter Vol. 4, No. 6)

(1999年6月22日 於NTT インターコミュニケーション・センターIII)

部屋の中で風車が勢いよく回っている。別に窓が開いているわけではない。

そもそも空間に風は感じられない。だが風車はあたかも風の強弱を感じとっているかのよう、回転の勢いを変化させているのである。この奇妙な光景は何だろうか。風車は確かに<何か>を検出し、どうやらその<何か>の様相を伝えてらしい……。

"Pinwheels" と名付けられたこの仕掛けはLANのトラフィックを検出し、精密な制御の下、状況を視覚的に提示している。これならば、モニターに映される棒グラフや数字も見ずともネットワークの状況を把握できるというわけ